

スイスはこんな国

サンモリッツ・ルガーノ周辺の“見て・食べ・歩き”

=日本・スイス 国交 150 周年記念に=

(1)

山本 浩 (29 政経)

総勢 12 名でトレッキングの旅へ

今年 2014 年は日本・スイス国交樹立 150 周年記念の年に当たり、この年にスイスの旅を楽しむ機会を得て、今しみじみとスイスとはご縁があったのだなと感じている。

このところ続いて年 1 回の海外トレッキングをしているグループから、「次は何処」の声が出たのは南仏～スペインのピレネー越えが済んだ昨年秋、“老害”の心配から次回のツアーリーダーは若手でお願いしていたところ、剣持さんが天溪の赤沼さんと相談の結果であるとして 2 つのスイス山旅案を提示してきた。

1 つはスイス中央部山岳地帯を縦走する案、もう 1 つはサンモリッツを起点としたエンガディンの山とイタリア国境沿いのティチーノ地方ルガーノのトレッキング。どうやら大方の意見は前者に傾いていたらしいが、私がサンモリッツにはアルプスの画家セガンティーニの足跡が多くあることと、アルプスで最も美しい稜線と評判のピアンコグラートを持つ名峰ピッツベルニナがあることから後者を推したため、今回の旅が実現することになった。ひょっとしてこの横車は、既に老害そのものであったのかもしれない。旅程は、2014 年 7 月 8 日から 18 日までの 10 泊 11 日。

利用した航空会社は今回で二度目のエミレーツエアライン。有難かったのは羽田から出発出来たことで楽をさせて貰ったが、帰りがやはり成田になったのは一寸残念だった。

アラブ首長国連邦の航空会社なので起点となるハブ空港はドバイ。乗り継いで目的のチューリッヒへは 7 月 8 日（火）13 時着、所要時間 16 時間（時差 7 時間）。ガイド志波邦彦さんの出迎えを受けてクルー 12 名全員が勢揃い、いよいよスイストレッキングの始まりである。



チューリッヒ出発



雨の中を走る



マイエンフェルト

雨のサンモリッツに到着

日本では台風 8 号の接近で不安定な天気が続いていたが、はるばると来たスイスも雨。サンモリッツへ 200km のカーツーリングも美しい田園風景を楽しむことが出来なかった。

チューリッヒ湖、ヴァーレン湖に沿って南下、約 1 時間半のマイエンフェルト Maienfelt でトイレ休憩。此处は 1880 年ヨハンナ・シュピリが書いた国際的ベストセラー『ハイジ Heidi』（日本ではアニメ「アルプスの少女ハイジ」）の故郷で 2 つのハイジの道 Heidi Weg があり、時間さえあればゆっくり楽しんでみたい所だった。

10 分の休憩で出発。やがて 5,000 年の歴史を持つスイス最古の街でグラウビュンデン州の州都でもあるクール Chur をかすめて走る。此处はライン川の谷にあり古来アルプス峠越えの基地として栄えたが、その後サン・ゴットアルド峠～ミラノの直行路が整備され、こちらがメイン路線となったため、今やクールは中世の香りを残す静かな街になったという。

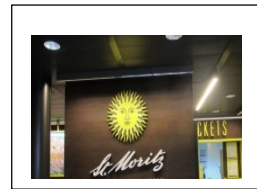
雨が続く道はジグザグに登って、ジュリアス・シーザーも越えたユリア峠 Julierpass 2,284m に差し掛かる。この峠を越えると前方にエンガディンの山並みが広がって連なり、目的のサンモリッツ St. Moritz 1,815m はもう近い。

サンモリッツのドルフ地区にあるホテル・ホイザー-Hauser に 17 時 20 分到着。サンモリッツはシンボルマークが太陽で、年間晴天率が平均 322 日という驚異的な晴れベースの街。もし雨に遭遇したらそれは珍しい体験であるらしいが、何も選りによってそんな時に当たらなくてもと思う。それにしても天候異変は地球規模の現象のようで、日本だけの“特許”ではないようだ。

地球の自転に逆らって長い一日の旅だったうえに、雨模様であったため夕食はホテルのレストランで済ませ、ゆっくりと明日からの行程に備える。



サンモリッツ到着



シンボルマーク

サンモリッツは人口 4,500 人の高級リゾート

明けて 7 月 9 日（水）、6 時起床。西に僅かな青空。然し、全体に厚い雲で何時降り始めてもおかしくない。

サンモリッツはサンモリッツ湖 1,768m から約 1,900m 位迄の傾斜地にあり、東にホテル、別荘、商業施設のあるドルフ Dorf 地区と、西に温泉、保養施設などのバート Bad 地区（3,000 年の歴史を持つ炭酸泉があり、元来湯治場だったサンモリッツの原点）に分かれていて、我等のホテルはドルフの上部、ポスタ・ヴェリア広場の近くにある。

この街を有名にしたのは世界最古のスキーリゾートであり、1928 年、1948 年と 2 回の冬季オリンピック、4 回のアルペンスキー世界選手権が開催されたこと。毎年凍結する 4 つの湖、シルス Lej da Segl、シルヴァプラーナ Lej da Silvaplauna、チャンプフェー Lej da Champfer、サンモリッツ Lej da San Murezzan の湖上を抜けてイン河 Inn/En に至る 45km のクロスカントリースキーや 100 年以上の歴史を持つサンモリッツ湖の雪上競馬等、それに周辺の山々には長大なダウンヒルコースが整備されていて冬がトップシーズンなのは間違いないが、夏は夏で世界各国から避暑客やトレッキング、湖上遊びにやって来る人々で賑わっている。

位置としてはイン河の谷で分水嶺マローヤ峠に近い上流部のオーバー・エンガディン地方（サンモリッツを過ぎて流れが北へ向かう辺りからがウンター・エンガディン）でスイスの東端、僅か人口 4,500 人の山間の小都ながら高級リゾートの地位を保ち続けている。

スイスは九州ほどの小国ながら、公用語はドイツ語、フランス語、イタリア語とロマンシュ語の 4 つがあり、それぞれの言語圏が分かれているが、サンモリッツのあるグラウビュンデン州は唯一 3 つの言葉、ドイツ語、イタリア語、更に 1 % に満たないロマンシュ語圏でもある。その昔、この辺りはローマ帝国の直轄地であったためにその頃のローマ人の言語の名残を留め、10 世紀頃のラテン語が基盤となっている、古くて誇り高い言葉がロマンシュ語なのである。

ちなみに我等が使う「スイス」と云うのはフランス語で Suisse、ドイツ語は Schweiz、イタリア語は Svizzera、ロマンシュ語は Svizra で、先程来のイン河 Inn はドイツ語、ロマンシュ語では En であることから、エンガディン Engadin（イン河の庭）がこの地方の呼称になっている。

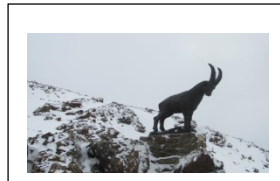
まずはピッツネイル展望台へ

前置きが長くなったが、志波ガイドから今日の天気は午後の方がより悪くなる可能性が高いので当初の予定の午前と午後を入れ替えて、午前にピッツネイル展望台トレッキングにしたいと提案があり8時半出発。上に少し登って学校広場 Pl. da Scoula の裏にあるフニクラ（登山電車）乗り場へ向かう。9時発、3分後にチャントレラ Chantarella 2,005m で乗り継ぎ、中間駅コルビリア Corviglia 2,486 m へ8分、更に大型ゴンドラのロープウェイ7分でサンモリッツのホームマウンテン、ピッツネイル Piz Nair 3,030m（ロマンシュ語で黒い峰）頂上に到着する。

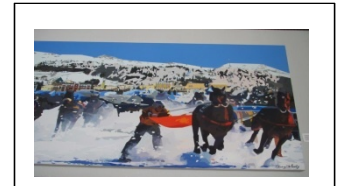
この辺りは昨日降った雪で下は真っ白。頂上駅横のシュタインボック（ヨーロッパアルプスの岩稜に生息する野生の大型山羊、別名アイベックス。グラウビュンデン州の紋章）の像も寒げに見える。



コルビリア



シュタインボック



氷上競馬のグラフィック

展望台ではスタッフが雪掻きに忙しそう。天気が良ければマッターホルンやモンテローザが見えるという謳い文句はとても無理だが、せめてピッツベルナナやピッツロゼックが見えればと思ったがそれも駄目で、辛うじて正面のピッツジュリア Piz Julier 3,380m が千切れ雲の合間に見て取れた。然し、眼下の湖沼群とサンモリッツの景観は真に素晴らしく、暫し見飽きることがない。

展望台売店には Engadiner、Palü、Bellavista 等の地ビールが並べてあったが、これからスタートするトレッキングを前にさすがに飲む訳にはいかない。カウンターの上には、冬のサンモリッツ湖の氷上競馬やエンガディン山群の素晴らしい夕景の写真も飾ってあった。

30分ばかりしてから再びロープウェイでコルビリアへ下りる。途中ダウンヒル競技のスタート小屋の横を通ったが、何しろ1,000mの標高差をサンモリッツのドルフ迄滑って行けるのだからスキーヤーにはこたえられないだろう。この斜面のスキーシーズンの賑わいが偲ばれた。

なお、スイスに縁の深かった秩父宮が北海道で冬のニセコを訪れた時、雪質の良さを愛でて「極東のサンモリッツ」とコメントし新聞に書かれたことから、倶知安町とサンモリッツの姉妹提携が実現している。

頂上駅から500mも下ってきているのだが、この辺りはまだ雪。歩き始めると雪の中から高山植物がそこかしこに可憐な顔を見せていた。緩いカーブを繰り返しながら下っていくので、景色を楽しみながら歩けるのが良い。

雪が少なくなると、あちこちでマーモット（語源はロマンシュ語で山のネズミ）を見かけた。丁度外出のタイミングだったのか直ぐ真下に顔を出していても逃げないので絶好の撮影チャンス、真に有難かった。



雪中高山植物



サンモリッツ湖を見ながら



マーモット

建物外壁の装飾画スグラフィットが目を惹く

高度が下がるにつれて花の種類も変わってくる。雪もなくなってサクラソウやミヤコグサ等、小さな花がマンテマ、テガタチドリから大ぶりのキンポウゲやアネモネに変わり、アルプスの名花エンツィアンやアルペンローゼも顔を出してくれた。

途中、一寸時雨れてきてレインウェアを取り出したが雨は大したことはなく、歩き続ける。

いつしか更に 500m 下ってチャントレラに着くとハイジ小屋 (Heidi hütte) があり、小屋の下の森には 1 km ほどの「ハイジの花の道 (Heidi's Blumenweg)」が整備されていて 200 種以上の花があるというが、確かめる余裕もなく急ぎ足で歩く。更にこの道はアロワ・カリジェの絵本『ウルスリのすず』に登場する「ウルスリの鈴の道 (Schellenursliweg)」へと続き、楽しい数々の木彫がメルヘンの世界へ誘ってくれた。



ハイジヒュッテ



ハイジの花の道



ウルスリの鈴の道

ロマンシュ語圏であるこの街の建物の壁にはスグラフィットという装飾画が目を惹く。これは壁の漆喰 (石灰) の上層を削って模様を描く技法で、当地でよく見られるモチーフは古代ケルト民族の地であったことを思わせる幾何学模様や牛馬などの動物絵、家紋や職業の紋章、格言や家訓をロマンシュ語で書いたものが多い。スグラフィットを見ながら歩くと、この地方に古くから伝えられた文化を感じ、今エンガディンに居ることを実感できるように思えた。

一旦ホテルへ戻って一休みの後、昼食はサンモリッツ湖畔で取ることにして出発、何しろ湖までは 100m 位下りなければならぬので簡単ではない。

先ずポスタ・ヴェリア広場 Pl. da la Posta Veglia からセルラス通り Via Serlas へ出て東に向かい、城館を思わせる超高級ホテルのバドルツ・パレス (勿論 5 星でロールスロイスが止まっていた) を過ぎた所から長いエスカレーター (幾つかに区切ってはあがるが) で湖畔に下りる。着いた所から東に行けばサンモリッツ駅に出るが、此処から駅までの間は巨大な地下駐車場になっている。

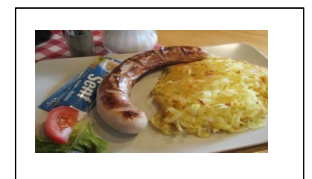
やっと明るい湖畔に出てヨットハーバーを過ぎた所にあるレストラン Segel Club に入る。昼は簡単にと、生ビールの後は焼きソーセージにレシュティ Röstli (短冊状のジャガイモを纏めてこんがりフライパンで両面を焼いたもの) で済ませた。



スグラフィット



ヨットハーバー



レシュティ

セガンティーニ美術館を訪ねる

帰りはエスカレーターではなくエレベーターにしたが、このエレベーターは真上に上昇するのではなく何と斜めに上がって行く、つまり小型ケーブルカーのようなもので吃驚した。

このままホテルには帰らず、ポスタ・ヴェリア広場から山側のソンプラッツ通り Via Somplaz に入って 15 分ほどの所にあるセガンティーニ美術館を訪れる。

ジョヴァンニ・セガンティーニ Giovanni Segantini (1858 ~ 1899) は、ドロミテ渓谷の出発点ボルツアーノの少し南、北イタリア(生まれた当時はオーストリア領チロル)のアルコの人で、ミラノで美術を学んだ後、アルプスの自然と人々に魅せられグラウビュンデン州を中心に多くの作品を残した世紀末を代表する象徴主義画家とされているが、私は素直に「自然を愛したアルプスの画家」と評価したい。彼の画法は「筆触分割」という明るい線を細かく塗り重ねる技法で独特の雰囲気醸し出す。

私がセガンティーニを知ったのは絵を描くことも見ることも好きだった父が画集で「アルプスの真昼」を見せてくれたのが始まりで、その後倉敷の大原美術館で「アルプスの真昼」の実物を見て感銘を受けた。言わば私にとって今回のスイストレッキング旅行の大きな焦点はセガンティーニの足跡を辿ることで、中でもセガンティーニ美術館訪問はその中心的イベントだった。

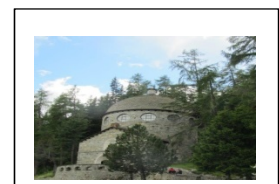
没後 100 年を記念して改装された石造りのこの建物はセガンティーニが 1900 年のパリ万博に巨大なエンガディン・パノラマ画を周面展示するために自ら設計した円型ドームパビリオンだが、その目的を果たすことなく急性腹膜炎で 41 歳の短い生涯を終えたために、輪廻転生の三部作として有名な大作「生(生成) Das Leben」「自然(存在) Die Natur」「死(消滅) Der Tod」がこの円型ドームに展示されている。



アルプスの真昼(日本)



アルプスの真昼(スイス)



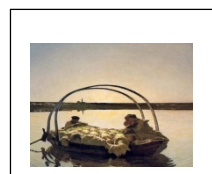
セガンティーニ美術館

日本にある「アルプスの真昼」は大原孫三郎の依頼を受けた画家児島虎次郎が苦心の末バーゼルの個人所有者から譲り受けてきたものだが、サヴォニンで描いたこの名前の絵は図柄が違うものがもう一枚あって、それがこの美術館に展示され、図録の表紙絵にもなっている。私が日本語版のこの図録を購入しようとする、受付のご婦人が日本にもこの絵はあるとわざわざ説明してくれた。

訪れた時刻が午後 4 時を過ぎていたこともあって来客は少なく、三部作をはじめとするアルプスの自然を描いた作品、イタリア時代の出世作となった「湖を渡るアヴェ・マリア」などをゆっくり鑑賞することが出来て心が満たされる一時だった。



三部作パビリオン



湖を渡るアヴェ・マリア



シャーフベルクに虹が

外に出てみると対岸のシャーフベルク Schafberg の方角に“虹”が立っている。この美術館がわざわざ終焉の山小屋セガンティーニヒュッテに向けて建てられたことを思い出した。

異国の地でのそば料理に衝撃を受ける

一先ずポスト・ヴェリア広場迄戻り、夕食に出かける迄は自由時間。近くのカフェ・ハンゼルマン Café Hanselmann へ行ってみた。1894 年パン屋として創業したスグラフィットの壁面装飾が美しい老舗で、オードリー・ヘップバーンやダイアナ妃がお気に入りだったとか。呼び物は当地方のスイーツ、ビュンドナー・ヌストルテ(クルミをキャラメルで煮て、硬めの生地で焼いたお菓子) 勿論各種チョコレートやトリュフも揃っているが、夕食前だし雰囲気味わえればそれでよしと奥のカフェでコーヒーを飲んだが、4.9 フランは有名店の割には高くないと思われた。

今日の夕食はポストバスで約 20 分、志波ガイドの案内でバート地区の郷土料理店 Veltliner Keller へ行く。ポストバスは真に便利な公共交通機関で、1800 年代中頃からあった郵便物を配達する馬車がこの元祖。1900 年代初頭にはバスに代わり始め、国内の到る所に路線網を広げている。

店に入って先ず飲んだビールは何故かサンモリッツへ着いてからずっと同じ CALANDA。しつこくボトルの裏面を調べたらハイネケンの字が読み取れたから、オランダの技術が入っているのかもしれない。ワインは、銘柄はまちまちだが、白はシャルドネ、赤はメルローだ。



カラダ



ピッツォケル

衝撃的だった料理はグラウビュンデン州エンガディン地方のピッツォケル Pizokel (そば粉で作ったパスタにチーズ、青野菜などを絡めて食べる)で、はるばるスイスに来てそばの料理を食べられるとは思ってなかった。然し考えてみると、日本にあってもそうであるように、通常の穀類がふんだんに取れない山岳地帯にあってはそばを常食とするしかなかったのかもしれない。そしてデザートにはハンゼルマンで我慢したビュンドナー・ヌストルテが出てきて満足満足。

既に暗くなったバート地区から再びポストバスでの帰り、温泉とカジノを擁する 5 星ホテル・ケンピンスキーは不夜城のごとく輝いていた。